

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 HAMLITSCH Nathan Jesse

論文題目 日本語借用拘束形態素に関する認知言語学的研究

— フレーム意味論および構文形態論の観点から —

論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	堀江薫
委 員	名古屋大学教授	杉村泰
委 員	名古屋大学准教授	秋田喜美

[論文の意義]

本博士論文は、形態構文論(Constructional Morphology)とフレーム意味論 (Frame Semantics) の観点から、日本語の「-ジャック」「-ロス」「-タイム」という英語から借用されて定着した 3 つの借用拘束形態素に関して以下の 2 つの研究課題を考察した研究である。

- 1) これらの拘束形態素は日本語でどのような構文ネットワークを示すか。
- 2) 「文化的フレーム」は日本語における借用拘束形態素の構文ネットワークにどのように貢献しているのか。

本論文の意義は、形態構文論とフレーム意味論を複合させた観点から、これまでの借用語研究の中心であった語レベルの借用現象ではなく、上記 3 つの拘束形態素のそれぞれが織りなす複合語の概念的ネットワークの全体像とその動機付けを、認知言語学及び心理学的観点から解明しようと試みた点にある。

[論文の概要]

借用語の形態論研究は数が少なく、中でも拘束形態素に着目した研究は皆無に等しい(第 2 章)。本研究では、(1) - (3) に例示する[x-jakku(ジャック)], [x-rosu (ロス)], [x-taimu (タイム)]という 3 つの借用拘束形態素を具体的な事例として扱った。

- (1) 広告ジャック < (合法的に) 広告でどこか (電車や駅など) を占有すること >
- (2) 逃げ恥ロス < 「逃げるは恥だが役に立つ」というテレビドラマが最終回を迎え、喪失感を抱くこと >
- (3) 親子タイム < 親子が何か楽しい交流活動をする事 >

本研究では、理論的枠組みとして「構文形態論」と「フレーム意味論」という認知言語学的な枠組みを採用した(第 3 章)。構文形態論 (Booij 2010) によれば[x-jakku]、[x-rosu]、[x-taimu]はいずれも「形態的構文」(語レベルにおける形式と意味の対) と考えられる。

第 4~6 章における事例研究の成果は以下の通りである。まず、[x-jakku]構文のネットワークは、3 つの意味拡張を軸としていることを指摘した。1 つ目は、特に「電波ジャック」という特定の表現の多義性 (<違法な電波妨害>、<宣伝活動のための電波占有>) を介した構文レベルのメタファー拡張である。2 つ目は、日本の電車に関する百科事典的知識 (《日本の電車》フレーム) に基づく「(ポスターで) 電車ジャック」→「(電車を) ポスタージャック」のようなメトニミー的拡張 (ないし範列的 (paradigmatic) な構文交替) である。3 つ目は、「ママ集団が (お喋りで) 披露宴ジャックをする」のように、「ハイジャック」という違法なテロ行為から合法的な占拠へと意味が発展するメタファー拡張である。このメタファー拡張の例は誇張表現の一種と考えられ、ユーモラスな響きを持つのが特徴である。

[x-rosu]構文は、2 つのメタファー拡張と 1 つのメトニミー拡張を見せることを指摘した。1 つ目のメタファー拡張は、<死を介して誰かを失うこと> (例: 「ペットロス」) から<親しい誰かを心理的に失うこと> (例: 「実家にも行けないから、おかあさんが孫ロスになるんじゃないのか?」) への拡張である。この拡張は、《日本の子育て》フレームに位置づけられるとともに、《日本の結婚》フレームおよび《日本のファン》フレームにおける同構文の使用も動機づけている (例: 人気のある俳優である玉木宏に由来する「玉木ロス」)。この拡張義においては、さらに「(引退による) 安室ロス」から「(安室奈美恵の) 引退ロス」のようなメトニミー拡張 (ないし範列的な構文交替) も確認される。2 つ目のメタファー拡張は、<心理的に親しい誰かを失うこと> から<心理的に親しいものを失うこと> への拡張であり、これにはしばしば《日本のファン》フレームが関与する (例: 「あまちゃんロス」<放映終了とともに「あまちゃん」というテレビ番組を失うこと>)。

[x-taimu]構文については、メタファー拡張が確認されない一方で、3 つの文化的フレームの

別紙 1 - 2

関与が見られた。そのフレームとは、《日本の家族・子供に関する活動》フレーム（例：「親子タイム」）、《プライベートの時間》フレーム（例：「入浴タイム」）、および《日本の食事》フレーム（例：「おやつタイム」）であり、これらはメトニミー的に関係付けられる領域マトリックスをなすものと考えられる。

さらに、第7章では、これらの構文ネットワークに意味拡張が生じる過程とその理由を論じた。具体的には、文化的フレーム、百科事典的知識、およびそれらのメタファー的およびメトニミー的意味拡張の3者間の関係について、これらの構文がどのように意味を得るかという問いに答えた。すなわち、「発話のための思考 (thinking for speaking)」および心理学の分野における「フォアラー効果 (the Forer effect)」および「自己奉仕バイアス (self-serving bias)」という概念を援用し、借用拘束形態素の構文ネットワークが上述のような様相を呈する理論的根拠を提示した。

[審査委員会による審議および合否判定]

口述試験では、申請者の方から博士論文の概要についての説明が行われた後、審査委員から質疑応答が行われた。本博士論文がコーパスからの多くの実例の渉猟に基づいて借用語拘束形態素の複雑な概念ネットワークの全体像とその動機付けの解明を目指した、新規性のある研究であることに関して審査員の意見の一致が見られた。一方、本論文の対象である3つの拘束形態素の選定理由、心理学的な説明の援用がやや唐突に見える点、借用語以外の複合語形成に関する多くの先行研究をより積極的に参照してもよかったと思われる点などに関して審査委員から質問がなされ、申請者は一つ一つの質問に対して丁寧に回答を行った。

本論文は、全体として本論文は質量ともに博士後期課程の学位論文としての基準を十分に満たしていると審査委員会の全員一致で判断した。したがって、本論文を合格と判断した。